

神戸和昭先生を送る

竹 内 比呂也

神戸和昭先生は、1992年4月1日に東北大学より本学文学部に着任され、2023年3月31日に定年まで3年を残して退職された。実に31年という長きに亘り、千葉大学において教育と研究に勤しまれたということになる。

神戸先生は日本語学、特に日本語史の領域で数多くの業績を上げられた。近世から明治にかけての近代日本語の形成過程が神戸先生の中心的な関心であったが、文法あるいは語彙といった、日本語学あるいは言語学における特定の主題領域に限定されることなく、また俯瞰的であり同時にその手法・分析において緻密であるという、一見矛盾しそうな、しかし神戸先生ゆえになしえた質の高い研究の積み重ねによってこの課題に取り組まれてきた。その研究の特徴としては、これまでの日本語史研究の中心であった口語史だけではなく、文語史の研究にも早くから積極的に取り組み、例えば、文語史と口語史との接点とも言うべき俳諧表現史に着目して日本語史的な視点から捉えようとするなど新分野の開拓にも意欲的であったこと、このような研究を進めるために、従来主流だった戯作文学類だけでなく、文書・日記類や自伝類をはじめ、欧米人の日本語学習／研究書であるいわゆる洋学資料などに至る多種多様な資料類を広範に取り扱い、戯作文学に限っても、それまでほとんど言語資料として注目されてこなかった黄表紙、合巻や末期人情本などにも着目してきたこと、また研究の手續きとして論証における厳密性を重視し、実証的態度で確実に足下を固めながら着実に論を構築することをめざし、常に研究の最も基礎となる資料にまで遡って根源的に考究しようとする資料論的な観点や、具体的な分析の手順にかかる方法論的な視点などがどの論文においても盛り込まれていることが挙げられる。それゆえ、神戸先生の近代日本語の形成過程にかかる研究は、研究の深さと広さを兼ね備え、着実であると同時に新たな切り口や資料の発掘といった学術的新しさを持つ優れたもの

であり、浩瀚な研究書にまとめられるに相応しい成果を上げられているが、そのようなまとめを在職中になしえなかったのは、ひとえに「これくらいいい」という学問的な妥協を許さず、筋を通そうとする神戸先生の自らに対する厳しさの現われということができる。

神戸先生の学識は近代語に限定されるものではない。平安時代語の音韻に関する通説を根本から批判的に論じて新たな可能性を提示するなど古代語についても高い見識を有しておられ、そのことは辞典類における語源・語誌に関する項目執筆という形で表れている。特に我が国最大の国語辞典として知られる『日本国語大辞典 第二版』(全13巻・別巻1)において、当辞典の大きな特色の一つである「語誌欄」について、項目執筆だけでなくそれに先立つ全体的な資料準備や立項作業にも携わられたことは、古代語から近代語にまで及ぶ日本語史全般にわたる幅広い視野と識見とを有されることの証左といえる。

神戸先生の学問的厳しさは教育面においても現われていた。ゼミでの指導の厳しさは広く学生に知れ渡っていたので希望する学生が殺到するというようなことはなかったが、その指導には定評があり、神戸先生が指導した学生の論文は文学部の優秀卒業論文に何度も選定されてきた。また、学部や大学院において主指導教員として直接指導した学生の中で、現在大学の専門職についている者の数は十指に余る。この指導の態度においても神戸先生の自らに対する厳しさが発揮されており、指導学生を自分の子分のように抱えこみ閥を誇るようなことは決してなかった。おそらくはご自分で育てたいと思われるような優秀な学生であっても、その学生にとって最も相応しいと思われる進学先を勧め、その学生がより高く成長できる可能性を考えていらした。結果として日本語学の発展に人材面で大きく寄与されたということになるが、神戸先生が手元でお育てになればもっと伸びたかもしれないと思うことがある。しかしこれは検証のしようのない仮説である。

また、神戸先生は、千葉大学着任以来、千葉大学日本文化学会(旧千葉大学国語国文学会)事務局として学会の管理・運営面をきめ細かく統括され、2015年から退職するまでの8年間は会長として会の発展に尽力された。また国立国語研究所通信研究員、文部省教科用図書検定調査審議会調査員など

を歴任されるなど、社会貢献にも積極的であった。

今日大学で禄を食むものにとって、大学運営にかかる業務から逃れることはできないが、神戸先生のご貢献には余人にはなしえない多大なものがあった。教授昇任後、文学部日本文化学科長、大学院人文科学研究院日本・ユーラシア文化研究部門長（文学部日本・ユーラシア文化コース長）を合計3度務められるとともに、大学院人文社会科学研究科博士後期課程文化科学研究専攻長の役目も果たされた。それ以外にも文学部教務委員長、旧教務副委員長（現入試委員長）、学生委員長、広報委員長、図書・紀要委員長、授業評価アンケート委員長等、また人文公共学府博士前期課程入試委員長等の諸役を歴任するなど、文学部、人文公共学府（およびその前身となる人文社会科学研究科等）を支えてこられた。また、千葉大学着任以来ほとんど毎年欠かさず学部入試「全学問題国語」出題・採点委員の中核となり、その間、数度にわたり主任の重責を担って卓越したリーダーシップを発揮された。これらの職務においても、神戸先生は常に穏やかに、着実に、思慮深く対処されてきたが、学問に対する態度と同様に、筋の通らないことを認めない厳しさも発揮されていたと思う。神戸先生とご一緒した20年の間に一度だけ会議の場で声を荒げた神戸先生の姿を見たことがある。それは手順において筋が通らないことへの異議申し立てであった。

神戸先生は、常に冷静沈着、穏やかな紳士でいらしたので、このような文章の読者を喜ばせるような、血湧き肉躍る武勇伝とは最も遠い位置に立たれている。代わりに、日本語学の道に進まれる前は音楽で身を立てようとされていたこと（このことについて、ご自身ではほとんどお語りにならなかったのも神戸先生流の筋の通し方であろう）、また常に若々しく、千葉大学に赴任されてからもしばらくの間はキャンパス内で新入生歓迎のチラシを在校生から差し出されていたことに言及することで、神戸先生の私的なあるいはチャーミングな側面について触れることをお許しいただきたい。神戸先生は今日の大学教員からは消えつつある古き良き教養人、趣味人であり、その佇まい、あるいは言葉の端々に自らを律する厳しさと共に豊かさが満ち溢れていた。その際たるものは、定年まで3年を残して職を辞されるという決断であったと思う。神戸先生は体調を崩された奥様に対して筋を通されること

を選ばれたのだった。神戸先生が奥様とのかけがえない時間を過ごされつつも、引き続き近代日本語の形成過程という研究課題に取り組まれ続けることを願ってやまない。

神戸和昭先生 略歴

- 1960年 9月5日 東京都に生まれる（3代続く江戸っ子の末裔を称す）
- 1979年 3月31日 東京都立小石川高等学校卒業
- 1984年 3月26日 埼玉大学教養学部教養学科卒業
- 1986年 3月25日 埼玉大学大学院文化科学研究科言語文化論専攻修士課程修了
- 1988年 3月25日 東北大学大学院文学研究科国文学国語学日本思想史学専攻博士前期課程修了
- 1990年 2月28日 東北大学大学院文学研究科国文学国語学日本思想史学専攻博士後期課程単位取得中途退学
- 1990年 3月1日 東北大学助手文学部
- 1992年 4月1日 千葉大学講師文学部
- 1992年 4月1日 国立国語研究所通信研究員（～1995年3月31日）
- 1995年10月1日 千葉大学助教授文学部
- 1997年 3月1日 文部省教科用図書検定調査審議会調査員（～1998年2月28日）
- 2006年 4月1日 千葉大学教授文学部
- 2009年 4月1日 千葉大学教授大学院人文社会科学研究科に配置換
- 2012年 4月1日 千葉大学教授文学部に配置換
- 2017年 4月1日 千葉大学教授大学院人文科学研究院に配置換
- 2023年 3月31日 辞職

神戸和昭先生 著作一覧

〈著書〉

1. 『日本語の歴史地理構造』 明治書院、1997年7月（共著）、担当「化政期～幕末期江戸戯作における合拗音と規範意識」 pp. 182-197.
2. 『日本語研究法〔古代語編〕』 おうふう、1998年4月（共著）、担当「青谿書屋本『土左日記』から見たe・jeをめぐる一解釈」 pp. 125-147.
3. 『語彙・語法の新研究』 明治書院、1999年9月（共著）、担当「芭蕉発句における格助詞ガ・ノの用法」 pp. 134-147.
4. 『語から文章へ』 東北大学大学院文学研究科国語学研究室、2000年8月（共著）、担当「幕末期～明治初期江戸語・東京語における合拗音と洋学資料」 pp. 388-402.
5. 『現代の位相研究〈国語論究9〉』 明治書院、2002年1月（共著）、担当「お屋敷奉公と江戸町人女性のことばのしつけ」 pp. 122-153.
6. 『ケーススタディ日本語の歴史』 おうふう、2002年11月（共著）、担当「位相」「言語生活」 pp. 162-167、168-173.
7. 『江戸語研究—式亭三馬と十返舎一九—〈国語論究12〉』 明治書院、2006年3月（共著）、担当「十返舎一九合巻の江戸語—『金草鞋』における「ござる」を手がかりに—」 pp. 485-523.
8. 『日本語日本文学の新たな視座』 おうふう、2006年6月（共著）、担当「いま近世・近代語研究で何が問題か—近世～明治期江戸語・東京語研究を中心に—」 pp. 514-523.
9. 『日本語とそれをとりにまく言葉たち(1)』 千葉大学大学院人文社会科学研究所、2008年3月（編集）、総頁数126.
10. 『日本語とそれをとりにまく言葉たち(2)』 千葉大学大学院人文社会科学研究所、2010年2月（編集）、総頁数94.
11. 『新明解語源辞典』 三省堂、2011年9月（共編著）、総頁数1024.
12. 『日本語とそれをとりにまく言葉たち(3)』 千葉大学大学院人文社会科学研究所、2012年2月（編集）、総頁数74.
13. 『日本語研究法〔近代語編〕』 おうふう、2016年9月（共著）、担当「初

版本から再版本へー『浮雲』本文改変の意味するものー』pp. 172-183.

14. 『近世の語彙—身分階層の時代—〈シリーズ日本語の語彙4〉』朝倉書店、2020年8月（共著）、担当「俳諧・川柳・狂歌の語彙」pp. 84-96.
15. 『江戸時代の日本語〈日本語史講座5〉』朝倉書店（編集中）（共著）、担当「江戸語の音韻」

〈学術論文〉

1. 「近世中期文語文における格助詞「の」「が」—芭蕉紀行文・日記及び書簡を資料とする—」『国語学研究』28、1988年12月、pp. 15-27.
2. 「『西山物語』における格助詞「の」「が」の待遇的表現価値」『文藝研究』121、1989年5月、pp. 43-54.
3. 「化政期江戸語に於ける合拗音クワ（グワ）—『浮世風呂』を資料として—」『国語学研究』30、1990年12月、pp. 67-81.
4. 「南部・伊達藩境地帯における方言分布調査の報告と考察」『東北大学日本文化研究所研究報告』別巻28、1991年3月（共著）、担当「調査の概要」pp. 55-58.
5. 「近世語資料としての江戸戯作の写実性に関する一検証—『浮世風呂』における合拗音の表記を中心に—」『語文論叢』21、1993年12月、pp. 3-20.
6. 「ゴマノハイ・ゴマノハエ考」『千葉大学人文研究』23、1994年3月、pp. 131-160.
7. 「黄表紙会話文の口語性について—山東京伝作『江戸生艶気樺焼』の検討を中心に—」『近代語研究』10、1999年10月、pp. 149-168.
8. 「『表記史』研究十箇条」『日本語学』19(11)、2000年9月、pp. 68-80.
9. 「『夢酔独言』における合拗音」『近代語研究』11、2002年12月、pp. 131-148.
10. 「蕪村発句における格助詞ガ・ノの用法—芭蕉発句と比較して—」『国語学研究』43、2004年3月、pp. 128-142.
11. 「格助詞ガ・ノの用法から見た俳諧表現史の構想—芭蕉・蕪村・一茶の発句をめぐる—」『近代語研究』12、2004年11月、pp. 445-464.
12. 「川柳・雑俳にあらわれた外来語—近世の基本外来語をさぐる—」『国文学 解釈と鑑賞』70(1)、2005年1月、pp. 56-67.

13. 書評「鈴木丹士郎著『近世文語の研究』」『文藝研究』160、2005年9月、pp. 67-69.
14. 「一九滑稽本における「ござる」の用法—『江之島土産』『六阿弥陀詣』『堀之内詣』『雑司ヶ谷記行』を中心に—」『近代語研究』13、2006年12月、pp. 205-224.
15. 「日本語史2—室町時代以降現代まで—」『文学・語学』190、2008年3月、pp. 68-72.
16. 「『雨月物語』『春雨物語』における時の助動詞—近世文語文の国語学的研究の一端として—」『千葉大学人文研究』40、2011年3月、pp. 93-121.
17. 「近代語—危うさの上に花開く多彩さ—」『文学・語学』201、2011年11月、pp. 108-111.
18. 「江戸東京語における自称オレの女性忌避」『語文論叢』29、2014年7月、pp. 1-13.
19. 「オイラたあ、誰のこったい?—江戸語における自称オイラの性格—」『語文論叢』31、2016年7月、pp. 1-12.
20. 「オレかオイラか、それが問題だ—近世後期における江戸直参の自称の体系についての覚え書き—」『近代語研究』19、2016年9月、pp. 233-247.
21. 「『浮世風呂』における「せ°」「そ°」をめぐる問題—江戸語研究の「常識」と「誤解」—」『語文論叢』32、2017年7月、pp. 1-6.
22. 「日本語学を創った人々—湯澤幸吉郎—」『日本語学』39(1)、2020年3月、pp. 26-29.
23. 「『雨月物語』における接続助詞「ツモ」をめぐる覚え書き」『語文論叢』36、2021年7月、pp. 1-11.
24. 「明治東京語における家庭内での夫/父の自称についての覚え書き—漱石・露伴・鷗外の場合—」『語文論叢』37、2022年7月、pp. 1-7.

〈啓蒙的解説・資料〉

1. 「漢字を中心とする国語問題年表」(矢島正浩との共筆)『漢字と国語問題〈漢字講座11〉』明治書院、1989年6月、pp. 323-363. (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)

2. 「学生のための国語辞書・漢和辞書解題」『千葉大学教員の選んだ100冊』千葉大学附属図書館、1995年3月、pp. 113-116.
3. 「四字熟語」（漆谷広樹との共筆）・「漢字を中心とする国語問題年表（補訂版）」（矢島正浩との共筆）『漢字百科大事典』明治書院、1996年1月、pp. 906-964、1675-1707.（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
4. 「語源のたのしみ—《サカナ》の語誌をさぐる—」『知の世界へどうぞ—千葉大学研究紹介—〈第2集〉』千葉大学、1998年2月、pp. 19-20.
5. 「江戸のことばと文化」『ことばの饗宴—日本のことば—』千葉大学文学部、1999年10月、pp. 11-16.
6. 「日本語史研究のすすめ」『国文学 解釈と鑑賞』66(1)、2001年1月、pp. 172-174.
7. 「若い世代の日本語はどこから来たのか—明治から現代までの若者ことば—」『日本語の揺れを考える—若い世代の日本語はどこから来てどこへ行くのか—』千葉大学文学部、2007年9月、pp. 21-25.
8. 「「型」の復権」『千葉大学日本文学学会会報』14、2013年7月、pp. 1-2.
9. 「種子を育て上げること」岡部嘉幸編『日本語の述語構造に関する総合的研究』千葉大学大学院人文社会科学部研究科、2015年2月、pp. 5-6.

〈事典・辞書 項目執筆〉

1. 『日本国語大辞典 第二版(全13巻・別巻1)』小学館、2000年12月-2002年12月、担当「あだ（婀娜）」「いかず（不行・不嫁）」「いちゃ」「えど（江戸）」「えどっこ（江戸子・江戸児）」「おかあさん（御母様）」「おかたさま（御方様）」「おかみさん（御上様・御内儀様）」「おさん（御三・御鬘）」「おちゃっぴい」「おっかさん（御母様）」「おとうさん（御父様）」「おとつあん（御父—）」「おふくろ（御袋）」「おぼうさん（御坊様）」「おやしきことば（御屋敷言葉）」「きゃん（俠）」「ごしんぞう（御新造）」「こちのひと（此方人）」「こなさま（此方様）」「こなた（此方）」「ごまのはい（護摩灰）」「さとことば（里言葉）」「さんす [助動詞]」「そうだ [助動詞]」「とんでもない」の各「語誌」
2. 『日本語源大辞典』小学館、2005年4月、担当「商売①」「商売②」

3. 『日本語学研究事典』 明治書院、2007年1月、担当「蕪村句集」
4. 『漢字キーワード事典』 朝倉書店、2009年5月、担当「国字問題」「交ぜ書き」
5. 『日本語大事典（全2巻）』 朝倉書店、2014年11月、担当「後期江戸こ
とばの敬語体系」「国語待遇表現体系の研究」「詞葉新雅」「職人言葉」「女
性語」「西洋紀聞」「男性語」「類聚雅俗言」
6. 『方言学大事典』 朝倉書店（編集中）、担当「潮来婦志」「浮世風呂」「お
らが春」「志不可起」